

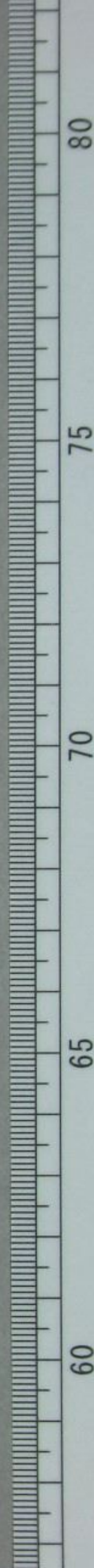
粘尾華

上

~ 5

1247

1



利
1247
巻



芭蕉翁袂馬紀

とけやのなまをちかから重くおのれこ
涌りこし泉石澗にぞう納涼の
地をふらに湿氣をきけいぬを移し
出次乾ちりけりおちりけりひき
居る腸をつらむらうことわかくもあ
るや書のうけをむとせまきく閉塞一乃
おろくちりけりあ人も便ちりく立ぬ

芭蕉



紙原集



今年就中を喪たうりよ歌あへり抑
 以る孤獨貧窮より徳業のよさを
 こそ量たり二牛餘人の門系を
 ひらつとも合はざる因と縁との不可思
 後山のあもも勘破りいへり天和
 年の久深川のまの居急火をわごとあき
 浪下ひらり管をうつよまへ燃のこらま
 生のひらん是て玉の徳のそつねま物

つとてなまれもとれらうと更月下入
 無我さらしむ昔のねく立帰りを
 ねね人ておれく焼糸の信州
 流をちやみまも心よめある流
 みものくく乃芭蕉を種り雨中吟

芭蕉世をりし蓋と一なるはしあゆみ
傳ふまじし堪困の友志けくうのひま
ちのつゝ芭蕉をよりのあはれおの
成せりのは圓覺も大巖和尚とより
易まらりしはあはれしきまらりし
はるゝ或時翁を卦のまゝみよ
年月時日を古曆の合さる筈考せり
まゝの華とくし卦のまゝしは

そよのそよる風を吹送雨も志は
しよのそよは教を志げく成るは
しよなくからりし世のまゝしよの
しよのそよはあはれしきまらりし
潜かたのそよはあはれしきまらりし
しよのそよはあはれしきまらりし
しよのそよはあはれしきまらりし
しよのそよはあはれしきまらりし
しよのそよはあはれしきまらりし

魚のあかりやねもかきまも慰むる六所
 けくらぬ橋を舟を梅あり塔ありもの
 ちりきと母の浅草やと眼前の奇
 景も推しゆくまののせちちありあも
 ちりきと母の浅草やと眼前の奇
 景も推しゆくまののせちちありあも
 る事うとて貞享初めとのお知利
 ちりきと母の浅草やと眼前の奇
 景も推しゆくまののせちちありあも

おいそむもさうのらあまら茶の
 羽織ひのよきあまら茶の
 あまら風狂しとあまら茶の
 魚多く都のちあまら茶の
 と向きあまら茶の
 うあまら竹舟あまら茶の
 吟りあまら徳作あまら茶の
 あまら近在隣郷あまら茶の

亦りちよるもせんはふ心まのいふいふ
 只の一目もぬらうもねも心氣らうらう
 衰城して病序のころ田みおつて旅の
 とらうらうらん其心はうらうらう
 けりうらう海く幻住菴 後菴子記 義仲寺
 おく所至る処の風景を心の物のり
 遊へるころ年ちり元来混本寺沸頂和尚
 子嗣法してひらう宗禪乃は師といふ

一氣鉄鑄生ナりてはひさうらうも老
 くらげうらうのころ句毎のころいふ
 も自然く山家集の骨髓をばらばら
 ありうらうらうねもその子の杜子美と
 ちうらうらう貧交人の厚く喫茶の舎
 盟うらうらう宗鑑う酒あも散乃ひと
 うらうらう成て自由躰放狂肺世拳
 ロウらうらうも現力之九篤實のちうらう

賀會祈禱の句

落つまわりくちあてに社集り木節
 風の気元あきまや露のあや／去来
 是りあまの竹の栴やみそさしい 惟茲
 初雪のあまそしあひん佐古の宮 正秀
 社のもよみおとやあまのいせ 之道
 飛よししそみつあまのり喜賀 伽香
 起よとく屯も嬉しよ湯等が 文考
 あはれや俵あつさく麻酔を 吞舟

峠と次野のさすりや流さゆん 文州
 日の向いてんも次野と我の菊し列

是と生并の笑納うく木節り葉を死を
 ぬらぬあまのいせあまのいせあまのいせ
 流さぬあまのいせあまのいせあまのいせ
 吞舟と舎羅こころあまのいせあまのいせ
 けうけあまのいせあまのいせあまのいせ
 けうけあまのいせあまのいせあまのいせ

けらふよとくけりけり病床よりうひぢの
 いんごふ^{ソモヒ}懐ちあのかたのふと色く向さ
 かしこりそ年らの深志の海一
 住吉の舟のりまのあふれを物さすもの
 のうらももわつらふらわくあたるしと母
 思ひあつた蟻迹のゆれ物のうらあよも
 めごとく是侍るやうにうら洞ちよあけし
 うつくすうたをききあふ考うのうらうよ

おのくゆふ退りて毒味の心をあきらめ
 膝らゆるもて病顔をひるこころあつたを
 おくし死期も宮ちあつて
 吹井より病を招くしあつたな 晋子
 とれけしとあつたあつたあつたあつた推の
 あまわつたあつたあつたあつたあつた遠
 木曾殿と塚をあつたあつたあつたあつたあ
 ちあつたあつたあつたあつたあつたあつた

月夜の光を照らすの如くは常々
おぼやめのおぼやめを思ふこと
は後の世のおぼやめを思ふこと
なほ業をいひしるはかのもよほ
てして居申す

うつくまふ菜の下乃 寒とてか 夫州
病中のあまうすもや みるまうり 去来
川津てあんと寒す、笑ひ声 惟危
志くしきし次のちく出る寒さゆ 支考

おひかおあゆま志くしみるまう 正秀
園とて菜餃あつはるおの 木節
皆まてみあらく 寒くはるんし列

十二日の申此刻とて死都うるはく
睡りておぼやめ物打うけおひさる
も櫃み入るあまの用のあつはる
らく川舟あつはるのせ去来し羽たのゆ
惟危正秀木節吞舟あま真つ子次くお

予よふよふ十人管ふる事袖寒よる夜ひ
 くらしきまふちひいほむとたりしそのお
 ち跡きつみほむしほ存録名らりうくか
 ちいら日ほむちひのりーお初らしあーた
 教をのひみりーし御潜の光をりしあひ
 けらるもー思ひまのりうんか名れし暮しは
 昔河らち今ららるのりーつ東南西北め招
 うわらつあつあつの栖を定ちるふまのりーや

真松島越の白山をなるとしあつあつ
 とあつあつしつて舞いへはいつの歌あつあつ
 しあつあつしつてあつあつあつあつあつあつ
 あつあつしつてあつあつあつあつあつあつ
 とあつあつしつてあつあつあつあつあつあつ
 けくしつあつあつあつあつあつあつあつあつ
 礼多信をたつてー京大坂古津船橋の
 連気振まけ者らつあつあつあつあつあつあつ

魚子ころもはあまらふ池あるまのこ
百余し淨衣そのお智月とし列の寺
わいふく著せものしん則長仲寺乃
直愚上人をけらひふよし門おのが
引人ら所よかこのようし木る塚乃右め
あふるく土いおあふらあものつうり
きる柳もあつうもこの墓れらきりあん
やそのまのく卯塔をあひひあへ垣を

桂屋

三

志先あ秋のくも紙を極く名のくま
次常の風景をこのちる癖ちうらあを
所らあふ山田上はさうあてさあも
ちあふのせ溝ある舟も祝念の紙を
のく一蕉紙の麻田家の雁遺骨を御
上の月よさうしあうりちあああ翁
あうく七目り程こあうくあああ
追善の真ち幸ああ入るハ予しうり

10

10

くまのあけおと合感して愚るや一紙
事の紙を残り作るに頼むはつひき
のつては我翁をたのむん業は是を
回向乃ちあつらふと云ふ

於栗津義仲寺牌位下 晋子書

元禄七年十月十八日 於義仲寺

追善之誂諧

晋子

このふりくまを筆に隠すや板を毛

温石はちくく皆市を成るよ考

は軒のわたりとくむ海山平 丈艸

よとくめる土の縁を多くする 惟存

つみ控し市のちまはれも短 木節

はつとてやうれやを乃た 栗由

森の名をさるのちくくは月の影 之道

其の身田中お世をいさぐり曲翠
旅くく臨く片後をいさぐ正秀
膝の金魚子さくわ女眉の物思ひ卧高
はらのさすりき想くうのむ泥足
こが治あこ餅の豆腐をせ治ま討し列
あきしとく人を悩るあやばく芝拍
葺くく葛藩子句人天氣合昌房
車の休むはぶくくく多の探芝

此の月の横く遠くあやうく川胡故
真く下く后あ流する牝玄
菴のあやうくいあのお世新の雨游刀
あやうくあやうくお世乃奇蘇葉
世のあやうく集のあやうく惜あやうく智月
多羅の青く立とくとて育つる吞舟
けををわくくみあは筑紫あ借土芥
井くあやうく刀荷作る貞袋
四くさお髪を垂るを脚あやうく美椿

昔よちる娘を、ねむりのかゝる 野童
一歩のまゝ未つひに、なほを痛むるなり 素聲
糸の留さるる糸、ゆるる酒 万里
酒風の思のあや、思志はるり 識々
藪くちあつとく、雀とるる丸 這萃
塩賣のつらつらある 世筒 許六
月のぬりく、みか志あふ 緇 回晃
新とけ、雀とるる雀とるる 荒雀
くちあつとく、みか志あふ 楚江

小屏風の内より、雀とるる雀とるる 野明
雪のつらつらある、雀とるる雀とるる 風國
福んころり、雀とるる雀とるる 木枝
かゝる堂み、雀とるる雀とるる 晉子
ひらひらと侍氣、みか志あふ 角上
あつとく、雀とるる雀とるる 之道
あつとく、雀とるる雀とるる 去来
挽くく、雀とるる雀とるる 土芳
春くく、雀とるる雀とるる 芝柏

本頁

三六

古毫

三

ぬらんちまきんく せんまお 卧高
 才子あそび 持くのよまおしる 尚白
 月ごころの井乃垢離 昌房
 新のちり 遊あそびもあそび 舟野
 世ごころの 新志あそびもあそび 犬艸
 花のあそびもあそびもあそび 惟然
 煮ごころの 粥あそびもあそび 美椿
 小待あそびもあそびもあそび 正秀
 從清あそびもあそびもあそび 石田急

日あそびもあそびもあそび 朴吹
 袋の猫あそびもあそびもあそび 角上
 里ごころのあそびもあそびもあそび 泥足
 七ごころのあそびもあそびもあそび 尚白
 二季あそびもあそびもあそび 舟野
 内あそびもあそびもあそびもあそび 昌房
 うーりあそびもあそびもあそび 昌房
 けあそびもあそびもあそびもあそび 昌房

ぶらぶらの地元うめく名を舟 魚光
 社はん五郎十郎立ちあしん 晋子
 新くくく代交林 敷 風國
 亦溢る水上情を引けけく 文考
 乳母と隣く送る啼児 正秀
 獅子舞の拍子あけある昼下り 丈艸
 雨氣乃をくく尾くくく 昌房
 在所く醫所の普法をくく 即高
 片所出くく 畠新 田 之道

くるくくの仕合くくくく昏のえ 去来
 木像くくく倚子をゆるくく 泥足
 とうきくく母あつく半句くくく 尚自
 くらぬのくくくかめる名内 卓袋
 漣ア我そのくくく水の天 角上
 経よりむくくくくあのみ聖霊 牝玄
 かうくくく花くるくくく負好珠 土芳
 村よりくくく伊勢講の種 芝柏
 暇みくくく小舞のあき 加減 這萃

軍と介しき。祀又ぐま物 卧高
 淵を彫く陸壇の上を過るく 晉子
 孰目めしふく念珠押もむ 正秀
 夷くの道はづらん巨著寒く 文考
 コスすれく替々大小の額 魚光
 味寄つきふゆゆ力あわゆる 楚江
 かみ華一の何り 可采ふ 游刀
 むらむら恨くゆきやりにどり 風國
 朝赤うけるさるく酒の碎 之道

白鳥の陰を葛を子孫せりけ 探芝
 と河あかりハ天下一高 去来
 飯あめく内えもむさあめ丹 尚白
 叩者より積をみくもくか秋 四危
 うら寒よ塚格子の窓ゆき 芝相
 文庫をあらは 福山伏 土芳
 信をともあて五月の目のもさ 惟徳
 海くも也よ武庫川のあり 夫艸
 寮あある知より鎖をうけさせ 牝玄

思くく怖の奥み戒名 支考
青天よちさうくむのうらむく 去来
巢ししきくちる千里峯 正秀

石四十人満ち真行大津膳所
京嗟峨括津伊賀之連衆也各
感愁眉而不求巧言也

傷亡師終事作句 初七日迄

志はせはせえも十夜の泪うふ 京去来
啼うちの和氣をらませ涙衛 傷栗由
みらぬ下氣も寒おととちる 大津木常
つるやの宗紙も寸白紙の表 日し列
りあもも泪もあや姫の表 膳不昌房
霞の墓をゆるかあを教あ 僧丈艸
了んのかきしをのいん帰む 去根許お
用とやみきる終の世のらん 同波村

墓中より十手あるをのりけり ぞ探芝
 和席あり端ありてや和のそね 大津楚江
 ぬきし着の老の髪は喜のそね 豊田成夷
 木更柿やあまのほし塚の上 大つ徳
 日乳よけ塚のりくねや和のそね 日高玉
 月雪よせよ体やや笈の脚 傳千那
 志け箱子紙子丸きみゆかた 大つ尚白
 了せ翁の語りぬれし奥羽塞をゆく
 くらりてとあひひこりてとちん子あのみ
 遺懐のあまりしをいふ塚をゆく
 といは

せはくしを回家河やあのみ 京徹士
 とせぬもの寒と春の色は 浮角上
 法法のまけてきん墓のそね 京野童
 一かき中一泣なみせん鴉の床 日風国
 身よある屯のそねも夕陽の 伊賀素方
 悲しきもあまししとあのみ 日卓袋
 我まの似をほりやあのみ 大坂之助
 石ころく墓もあましくあのみ 日芝拍
 藤のゆも入る悲しよ野山 傳支考

入月廿日此の歌交りの歌歌 京春沈

十六日音子を勾住庵千とあひし
あひのくき新とといふ椎のゆきを
あまきこもく千付をさるるを

あしし甘あを力みわくすそ 曲翠

あはれくあはれ色つらむあはれ 正秀

うりくさひさすあはれあはれ 昇高

あはれあはれあはれあはれ 泥足

あはれあはれあはれあはれ 霊椿

あはれあはれあはれあはれ 音子

あつえいあつえいあつえい 燒磯神

あつえいのあつえいのあつえい 月荒雀

あつえいのあつえいのあつえい 大坂春舟

あつえいのあつえいのあつえい ぢ魚光

あつえいのあつえいのあつえい 日回鳥

あつえいのあつえいのあつえい 日流刀

あつえいのあつえいのあつえい 日朴吹

あつえいのあつえいのあつえい 今木枝

あつえいのあつえいのあつえい ぢ這草

此の波のつらさをよすう土の志 大津土竜
 ちりし涙のもろくお探りのおまふ ぢ進屋
 ひとりんをいひてえゆる塚のま 日伴九
 体うけて涙みあらすのまふ 如和女

二七日廟祭之悼句所と文通

吾こわく波の光田わみ山 志
 小波岸のあはれよ自らのあはれ 尺草
 みよの目や所よなまのあはれ 大坂加柿
 けいこや悲しきうそ柳 ぢ進屋

間も遠くありてありて今也村のま 日吾我
 松のまゑえん世の形もよしのま 日松泉
 げんえんちのまみせん丸の市 日朝巫
 菊松のえん紀乃 馳走り 聖国裕睦
 朝日うけてまのまのいひの塚のま 日重氏
 赤くけて指のまのまの月うま 女素聲
 ちのくしちのまのまのまのまのま 女万里
 花のまのまのまのまのまのまのま 葉の惟
 花のまのまのまのまのまのまのま 女可南

その日 襟あけはる 酒よ

ぞ 徹房

よちつけをまねも仰らぬ目た

日 麻三

木急の目も候のしづね戸

日 砂上

カそく 塵うけはる 時あふ

日 蚤鳥

糸柳のわくをさうら 秋川

向震新

拵あけしるもの 秋まの竹の裏

さう来儿

み殿つてんてりあのもくね

小倉閑夕

幻のひらり拵あけの 梅屋

さう有

かあふ 獅のあぐさやれ 牡丹

表松木守

新巻のあけはるしん 秋の原

この如行

さうあふあふあふの 店よ 積りしり

聖田小作

くわらあけの 小坊のしやや
作を 竹のあふ

大根川あふりしり せきるあふ

京甚木

三十七日 伊賀連流追悼句

あふあふあふあふの 秋の原

いら玄鹿

さうあふあふあふの 梅あな

山岸車来

あふあふあふあふの 色拵あふ

浅井風睦

寒菊あふあふあふの 膳の起

山田雪之

枯草よ新入るる男衆のふ 糸田作木

笠を返す時を待つ 井上 宗富

そのまゝの中を歩む 大保仙杖

すくなくとも 松本冰固

新くこの世の中を 内神九郎

水車の遠よわねや 西橋百成

そのあつきの 七師の書

あつきの活る文字の村 半残

あつきの茶の木の 西橋百成

根あつきの 満

ほろり 来川鳥栗

四七日を 普音文

猿の乃 伊能孫州

そのあつきの 日園友

あつきの 日定芽

信ちのあつきの 日宗比

みちのあつきの 日斗從

あつきのあつきの 日芦本

河の合ふところの悲しきよき水戸 七援不
 せうせいの笠をこしらへられ笠 日産牧
 車の前より水鏡の心ありの 尾列高川
 梅川村 一羽をまねく鳴る 日素賢
 雲のちりて光をたぐいし牡丹の 日九次
 もつゝもあやふくはくはの揃 光尊
 明く晴あきの日影を柳をま 大坂加番
 持剣又〜川ゆもゆる月か みの低耳
 文臺を〜志ぬ影し 古江市 伊予黄山

上終

